

巖山と巨石信仰の国、上毛のイワクラ

写真：写真家 須田郡司 文：超歴史研究会 皆神 隆



赤城山

上毛三山とは、群馬県の赤城山、榛名山、妙義山の総称である。いずれも古くから信仰されてきた山々であり、それぞれに、赤城神社、榛名神社、妙義神社が祀られている。群馬県および栃木県を古代は毛の国といった。のち毛の国は分化され、上つ毛の国と、下つ毛の国となった。上野と下野である。すなわち上毛とは群馬県の古称である。



榛名富士

助けを求めたという。そして、黒鷹の矢で傷ついたムカデは赤い血を流しながら山に戻り、血に染まった「赤き山」より山名が生じたという伝説がある。

榛名山は、同じく広い裾野を持つ二重成層の活火山で、最高峰である掃部ヶ岳（かもんがたけ）は標高1449m、カルデラ内は



妙義山

は中央火口丘の榛名富士（1390 m）と火口原湖の榛名湖がある。妙義山は、白雲山（1084 m）、金鶏山（856 m）、金洞山（1080 m）の三山をあわせて妙義山



妙義山の洞門

と呼び、この三山を中心とした一帯を表妙義山、その北西面の谷をへだてた対岸の山々を裏妙義山という。山体は第三紀に噴火した火山の一部で、安山岩と凝灰角礫岩の累層からなり、侵食が進み石門、ローソク岩などの奇岩怪石に富み、

日本三大奇勝の一つとされる。上毛三山はいずれも、修験および密教の信仰の形跡が伺えるが、同時に巨石信仰が現代まで残されている。また、その周辺にも巨石を祭祀するイワクラが散在するところから、上毛はまさしく巨石信仰

の国といえる。

「榛名神社」
 榛名神社は榛名山西南榛名川の源流溪谷標高800 m前後の巖山（いわおやま）の巨石群の中に所



榛名神社

在する延喜式神名帳上野国12社中の小社、祭神は火産靈（ほむすびの）神、埴山毘売（はにやまひめ）神である。社伝によれば、綏靖天皇の御宇饒速日命の子可美真手命父子が榛名山中に神籬を立て、天神地祇を祀ったのをはじめとし、用明天皇元年（585）丙午の年に祭祀の場が創建されたといわれている。榛名神社の初出は延喜式神名帳であるが、初期鎮座地は不詳、一説に東南麓に6〜8世紀の古墳群があるが、これらを残した車持氏居住地周辺にその変遷とともに祭祀された神が榛名神社の前身といわれる。修験道の練行場であったと思われる現榛名神社の岩場へ榛名神社を持ち込んだのは、修験、密教の徒と考えられ、本地を十一面観音、神社を満行宮大権現とする神仏習合の鎮座であったと思われる。一説によれば、榛名神社を祀った氏族は物部氏で、北

象）としていたという。榛名神社本殿の後ろにそそり立つ「御姿岩」（古くは地蔵岩と呼ばれていた）は開山当時も信仰の対象として位置づけられていたと考えられる。神楽殿の後には神楽殿を屏風のように取り囲んでいる岩壁があり、その中腹に洞窟のように見える穴が三つほど並んでみえる。この穴を弥陀窟と呼んでいて、三つの穴は阿弥陀三尊に見立てたとも、洞窟のなかには弘法大師の彫った阿弥陀如来像が祀つてあるとも伝えられる。そして、この穴にこもって表を向いて座ると、否応なしに御姿岩と真向う形になるのである。ここは実にすばらしい行場であったと思われる、このような行場があったからこそ、信仰の場としての榛名神社の勢力が拡大したのではないであろうか。5月8日に行われる「神幸祭（しんこうさい）」では、本殿から神幸殿へ御神体（神鏡）が移された神

輿が出御。出御の後、神楽殿にて小神楽が奏上される。そして5月15日の「還御祭(かんぎよさい)」では、神幸殿から国祖殿へ神輿が還御。還御した神輿から御神体(神鏡)が官司の手で取り出され、袖で覆い隠しだれの目にも触れないようにして御内陣のものとどこへ戻される。

榛名神社の本殿は、御姿岩と一体となっており、そのつながっている部分は御姿岩の洞穴に奥深く入り込んでいて、御内陣といわれている建物が組み込まれている。御内陣には扉が三重に付設してあって、手前の二枚は御祈祷の際開扉することがあるが、奥の一枚は開かずの扉といわれている。それを開扉するのは丙午還暦大祭のときだけといわれているが、その時でさえ扉の奥には幕を引いて、その中に置かれているものが人目にふれないようにするという。丙午還暦大祭の開扉もいわゆる御開帳

ではなく、建物の修復が目的のようである。榛名神社では、そこに何があるか、決して公開しないため、それを知るすべはない。

ところが明治3年、榛名神社の神仏分離を行った新居守村は、そのときの記録である「春名山日記」に次のように記している。「13日(明治3年5月)(前略)それより鉄の扉いと重ありという所に入る。ともし火つけて入る。瓶6つあり。今2つありたげなれど、崩れなどしてかなし。(後略)」これによれば、守村は神仏分離の取締りという立場から、ふつう立ち入ることのできない御内陣にふみこんで、中にあるものをつぶさに見てしまったものと思われる。そこには瓶が6つあって、他に壊れたものが2つあるとしている。それは弥生式土器であったとも考えられるという。仮にこの瓶が弥生式土器とすれば、岩壁の中腹にある洞穴から弥生式土器や人骨などが見つか



古い神璽

つたという吾妻町の岩櫃山鷹の巢

したものであろう。

岩陰遺跡や、婦恋村のとっくり穴遺跡、月夜野町の八束脛洞穴遺跡

「岩神の飛石」

などと共通した要素があると思われる。社殿の造成前は、御内陣を組み込んだ洞穴は岩壁の中腹にある洞穴であったと推測できる。この瓶を洞穴に納めたのがいつであったのかは不明であるが、後年、行場として見出したときに修験者や密教徒がその瓶のある洞穴に畏敬の念をいだき、祀り始めたとも理解でき、その後その洞穴のある岩全体が信仰の対象となって定着

岩神の飛石は前橋市の街のなかにある岩神稲荷神社の御神体であり、国指定天然記念物となっている。周囲が60m、高さは地表に露出した部分だけで9.65m、さらに地表下に数mは埋もれている。この大きな岩は、昔石工がノミをあてたところ血が流れ出したという伝説がある。岩は赤褐色の火山岩で、表面には縞のような構造も見られる。これは、火口から溶

岩として流れ出したものではなく、火山から噴出した高温の火山岩や火山灰などが冷えて固まってできたと考えられる。この地点より約8 km上流の坂東橋の近くの利根



岩神の飛石

山崩れに由来することがわかる。前橋の街の地下には、「前橋泥流」と呼ばれる地層が厚く堆積しており、これは約2万年前に浅間山で起こった山崩れが、水を含んで火

川沿いの崖では、10万年以上も前に赤城山の山崩れでできた厚い地層のなかに同じ岩が認められる。このことから、この岩は赤城火山の上半分が無くなくなるほどの大規模な

山泥流に変化して流れてできた地層である。この地層のなかにも岩神の飛石と同一ような石が多く含まれている。またここは火山泥流の堆積後、平安時代以前までの間に、利根川が流れていたところでもある。これらのことから、この岩は現在の坂東橋のあたりに堆積していた地層の中から、約2万年前の火山泥流によりこの近くまで押し流されてきたものと思われる。さらにその後の利根川の洪水によって、今の場所まで運ばれてきたと考えられる。この位置は榛名山と赤城山の

中間の南になるが、山岳信仰のひとつの形として巨石をイワクラとして祀ったものと思われる。



産泰神社

「産泰神社」

地元では「産泰さま」と呼ばれ親しまれている神社であり、主祭神は木花佐久夜毘売命（このはなさくやひめのみこと）で安産と子育ての信仰を集めている。この神社の創建は、社伝によれば履中元年とされているが定かではない。

しかし社殿背後に累々としている巨石群から、神社信仰の初現形態の一つである巨石崇拜にその起源があるとみられ、歴史の古さがしのばれる。

安産を祈る者が、軽くヌケル（生れる）ようにと底をぬいたヒシヤクを奉納するようになったのは、江戸時代以降のことで前橋 伊勢崎などをはじめ県下一円の人々から、安産の神として篤い信仰を受けた。

特に前橋藩主酒井雅楽頭は、社殿の造営をするなどその信仰著しいものがあった。酒井氏の造営になった社殿は、多くの彫刻で飾ら

れ、内部格天井には酒井抱一が描いたとされる極彩色の花鳥図もある。

数ある社宝のうち八稜鏡は、平安時代のもので前橋市の重要文化財に指定されている。また四月十八日例祭の際に奉納される太々神楽も重要無形文化財に指定されている。

赤城山の南に位置するその社殿は西向きであるが、境内からは赤城山が望まれ、ここもかつては山岳信仰のために祀られたものと考えられる。江戸時代に元々南向きであった社殿を前橋城向きを変えて再建されたものという。

近くには「石山観音」もあり、そこには馬頭観音が祀られ、古代岩窟に人が住んだ形跡があるという。石山観音と二之宮赤城神社と産泰神社を結ぶ三角形の北の頂点産泰神社からの中線を延長すると、その北には赤城の荒山が鎮座している。

「赤城の櫃石」

三夜沢赤城神社の真北にある荒山の裾野の突端に円錐形の小山があり、その頂に巨石が数個散在し、いちばん南に「櫃石」と呼ばれる赤岩がある。それは、赤城神社から約2kmの位置であり、5、6世紀頃の祭祀跡といわれる。

長径4.7m、短径2.7m、高さ2.8m、周囲12.2m程の、南北に長い自然の石で、まわりにもいくつか石があるが、ひときわ大きくて目立つ。この石のまわりから、小さな手づくねの土器や、滑石で作られた玉や剣形の飾りなど古墳時代のまつりに使われた品物がたくさん見つかる、ということが江戸時代から知られていた。なかには、7cm以上もある大きなヒスイの勾玉もあった。櫃石のまわりから見つかる様々な品物は、実際の生活に用いられるものはほとんど無く、祭祀のための

ものばかりであり、イワクラ信仰があったことを示す代表的な遺跡として県の指定史跡になっている。



赤城の櫃

「名草の巨石群」

栃木県足利市の山中に鎮座する
厳島神社境内からその奥にかけて
の一带に古生層粘板岩を貫いて出
てきた花崗岩が並んでいる。花崗
岩は非常に大きな塊であったが、
方状の節理に沿って玉ねぎ状に風
化し、水に洗われた節理間の核心
の部分が球状に残り、巨岩を積み
重ねた形になったものである。弁
天沢の水底に金色に輝く小片がた
くさん見られるが、これは花崗岩
が風化してできた黒雲母である。

この巨石群は粗粒な花崗岩特有の
風化状態を示す代表的なものとし
て昭和14年に国の天然記念物に
指定された。弁慶の手割石、お供
石、太鼓石、石割楓、お舟石など
の名称が付けられた巨大な石が
次々と現れて圧倒される。

て弁財天を祀ったのが始まりと伝
えられている。白い大蛇の道案内
により、清水の流れる大きな岩の
前に出た大師は、岩の前にすわり、
経文を唱えて弁財天を勧請し、前
に祠を建てられたという。元禄6
年（1693年）金蔵院住職が領
地検分の家老に弁財天宮の再建を
願い出て、下附金3両でお舟石上
に石宮を建立したのが本宮である。
明治の神仏分離令により厳島神社
となった。

「弁慶の手割石」

弁慶がこの石の上に仁王立ちに
なり、手にした錫杖（しゃくじょ
う）で「エイッ」とばかりに突い
たところ、さしものこの大石も弁
慶の怪力によって見られる通り真
二つに割れて現在の姿になったと
伝えられる。

「お供石」

おそなえ石の下に洞穴があり、
この洞穴をくぐり抜けることを胎
内くぐりと言う。胎内くぐりをす



お供石と厳島神社



弁慶の手割石

ると、子供の無い方は子宝にめぐまれ、妊娠している方はお産がたいへん軽くすむと言われている。

「観音山古墳」

上毛野最後の前方後円墳で6世紀末の築造、高崎市綿貫町に所在する。墳丘長97m、高さ9m余りで、二重の濠をめぐらせる。昭和42年からの発掘調査で、石室内から多くの副葬品が発見された。刀装具や馬具など時代の粋を集めたものばかりで、被葬者が当時のわが国の重要な位置にいたことを物語る。石室の玄室は、長さ8.2m、奥壁幅3.8mであり、壁は加工した角閃石安山岩を用い、天井は重量感あふれる砂岩で覆う。出土物は近くの群馬県立歴史博物館に展示されている。

東国の中心となった毛野（けぬ）は、大和政権との政治的な

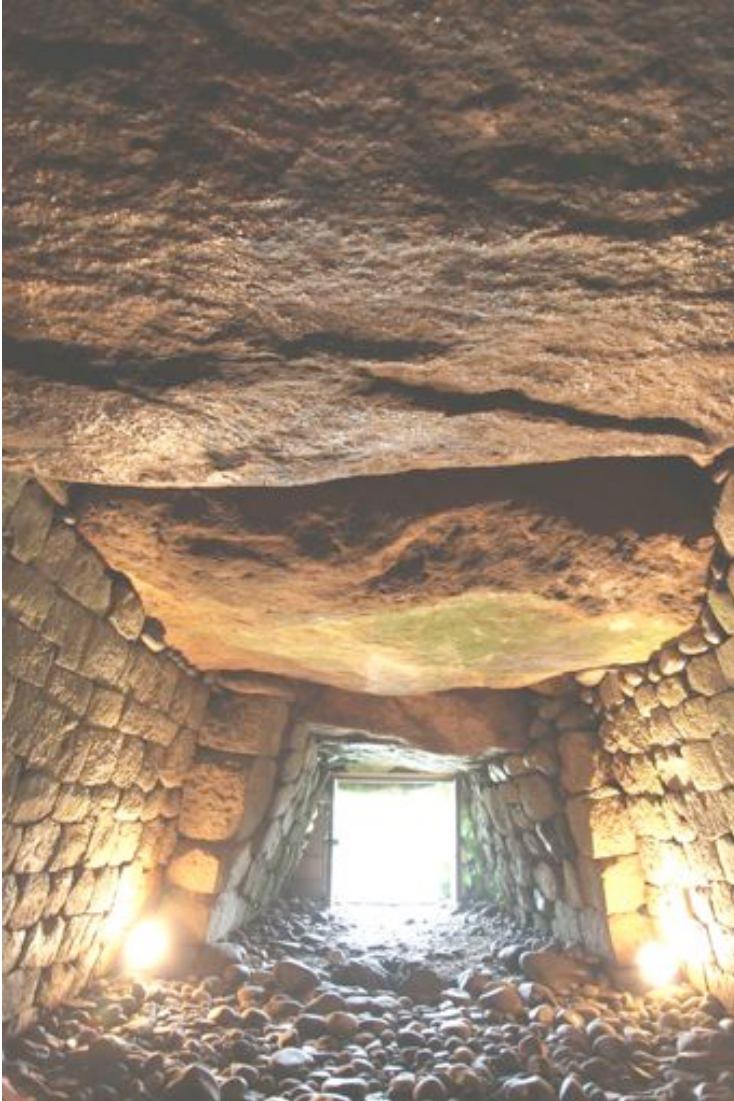


観音山古墳

結びつきを強め、やがて上毛野(かみつけぬ)現在の群馬県と下毛野(しもつけぬ)栃木県に分割された。6世紀になると、仏教などの新しい文化が伝えられ、上毛野でも須恵器や金属工芸などの新しい技術が普及した。また、生産力の向上とともに地域的な支配者が成長し、墳丘長が100m前後の前

方後円墳が各所に造られた。観音山古墳には登ることができ、上毛三山を一望に見渡すことができる。

了



石室